令和５年１０月３１日

源　流

どんなに大きな滝であっても、そのはじまりは、どれもたったひとしずくの水滴である。

わたしたちの鳴滝高校は今年【創立２４年目】を迎える。百年を超える伝統を持つ学校もある中、わたしたちの学校はまだ若いとも感じられる。しかし、鳴滝の歴史をひもとくとき、その思いはかき消され、この２４年だけでは語れない源流を知ることになる。

鳴滝ほど多くの学舎が建てられた町もそう多くはないだろう。シーボルトが開いた鳴滝塾をはじめとして、旧制長崎県立長崎中学校（現長崎東高・長崎西高の前身、大正３年～昭和２３年）、長崎県立女子短期大学（昭和２５年～平成１２年）、長崎県立看護学校（昭和４０年～４６年）と、鳴滝は学びの場として選ばれ続けてきた。この地が、いかに学問に適した環境であるかを物語っている。

しかし、学校の本質が「そこに学ぶ生徒」であると考えるとき、鳴滝高校の本当の源流は別にあることを知る。鳴滝高校の直接の前身、長崎市立長崎高等学校（夜間部）と長崎県立長崎西高等学校通信制である。長崎高等学校は大正１１年に開校した長崎市立商業高等補習学校の流れをくみ、長崎西高通信制は昭和２３年からの歴史を持つ学校であった。仕事・家庭との両立、病気を抱えながらなどといった困難な状況の中、それでも学びたいと集った「本物の高校生」がそこにいた。１５歳から、７０歳を超す高齢の方まで机を並べる。年齢に関係ない青春があった。悩み、苦しみ、何度も挫折しかけながらも、仲間の支えや教師の励ましによって多くの生徒達が卒業していった。これらの流れをくんでいることこそ、鳴滝高校の本当の誇りである。

そこに新時代を見越し、共生と個性の伸張をめざす昼間部が加わったことの意義は大きい。鳴滝高校の新たな源として、強くたくましく、そしてやさしい流れを生み出してきたか、もう一度、「鳴滝」で学ぶ意味を自分自身に問い直してみて欲しい。

鳴滝周辺に、滝らしい滝はない。滝を大きく鳴り響かせるような豊かな流れを、鳴滝高校に学ぶ皆さんこそが、つくり出して欲しい。ひとつひとつの水滴がきらきらと輝く、大きく豊かな流れが、ここ鳴滝高校にあることをどこまでも響かせて欲しいと思う。

（2009 発行『昼間部相談部便り』より抜粋。ただし、創立年数のみ現在に合わせ変更）

校章の由来

いにしえよりの流れを受け継ぎ、明日への架け橋となる。（中略）伝統を受け継ぎ広い世界への橋を架けるような人材を育てる学校であることを表しています。

（制作者：山田　徹氏）

NAGASAKI
NARUTAKI
HIGHSCHOOL